

教科教育キャリアアップフィールド（英語）

コース名：小中高が連携した英語カリキュラム・ 学習指導について考える

英語教育専修 大和隆介

1. 研修実施の状況

(1) コース内容とそのねらい

今年の10年経験者研修に参加するにあたり、本年度のコース名（教科教育:英語）として、「小中高が連携した英語カリキュラム・学習指導について考える」を掲げた。内容は、「小学校での国際理解を目指す中での英語活動、中学校での音声言語活動主体の指導、高校での4技能バランスの取れた指導。それぞれの学校における学習指導が、より効果的なものになるように、①各校種における指導のあり方、②各校種間の連携のあり方について共に考える」というものである。

教科指導の実を挙げるためには、指導する者が、教科の専門内容だけでなく、その教授法、そして学習者の認知的・情意的発達過程を適切に理解し、それらの知識を日々の教育実践に生かすことが必要となる。しかしながら、仕事に追われる現実の中で、多くの教員にとっては、専門書を読む時間を確保することは難しい。自らが直面する指導上の諸問題を、同僚との話し合いを通して、解決していく精神的余裕も時間的余裕もないのが現実だろう。まして、英語の教員が校種を超えて、互いの教育実践を共有し、教科指導のプロとして議論を交わし、指導のあり方について専門的に深く考える機会を持つことは非常に稀なことだと言える。

一方、英語教育に関しては、現行の学習指導要領において、教科内容が精選されただけでなく、「実践的コミュニケーション能力」の育成が最重要の目的であると明記され、教室での指導法は大きな転換点を迎えている。結果として、英語指導のあり方は、以前と比べても、あるいは他の教科と比べても、校種間における違いが縮小するよりも拡大する傾向にある。このような現状を踏まえて、本コースでは、異なる校種で英語を指導する教員が情報を交換し、お互いに理解を深める機会を提供することを第一の狙いとしたわけである。

(2) 参加者と研究テーマ

本コースには、中学から2名、高校から3名の教員が参加した。参加した教員の当初の研究課題は、それぞれ以下のものであった。

中学教員A：「基礎基本を確実に身に付け、個性の伸張を図る教科指導のあり方—実践的コミュニケーション能力の基礎を養い高める指導」

中学教員B：「どの生徒にも満足感を与えるきめ細かな指導の在り方—単位時間のワークシートの工夫を通して」

高校教員 A：「小・中学校の英語学習を実態を理解した上で、高校英語への導入・指導、大学受験への英語指導を考えたい」

高校教員 B：「高校での 4 技能のバランスの取れた効果的な指導について研究する」

高校教員 C：「生徒の言語能力がどのように伸びるかについて研修する」

上記のように、本コースに参加した各教員の研究課題は、その志向性において必ずしも等質のものではなかったが、異なる校種での指導内容に対する理解を深めることにより、自らの指導のあり方を問い直し、改善しようとする点に関しては共通理解が存在した。また、本コースへの小学校の教員の参加はなかったが、参加した中学の教員 2 名は、小学校で 1 年間英語活動を中心に指導した経験や、小学校教員との定期的な交流の場を持っていることなどから、小学校の英語活動に関する情報が不足することはなかった。

(3) 研修の進め方

全員が会した第 1 日目の午前中の研修では、①自らの学習者としてのプロフィール、②教員としてのプロフィール、③英語教育に対する理念・信条等について、十分な時間を取り、和やかな雰囲気の中で、相互理解や自己理解を深めた。その後、午後の研修において、①自らの研究課題の内容と狙い、②研究を進めるための方法と手順について、活発な議論を交わした。

このような第 1 日目の情報交換や討議によって、最初に参加者が漠然と持っていた問題意識は整理され、研究内容やその方向性が明確かつ現実的なものとなった。その後、メーリングリスト等を活用しながら、必要な情報やアドバイスを交換しながら研究を進め、9 月 8 日に設定された研修最終日に成果（レポート）発表を行うことにした。

2. 研修の評価

(1) 協働的研修の持つ意義

現行の学習指導要領が最大の教育目標に据えている「生きる力」の育成にとって、指導する教員自身が主体的に問題を解決していくような教育を受けておらず、同僚と協働的関係を築きながら課題を遂行していく経験も不足していることが、大きな障害であると言われる。このような協働的関係は、各自が勤務する職場において構築されるべきであるが、個々の閉ざされた固定的職場環境にあっては、それまでの多様な柵や人間関係のために、その構築が困難である場合も多いことだろう。たとえば、困難を克服し協働的関係が構築されたとしても、同質の教育実践を背景とした協働的関係の場合は、多様性に対する柔軟性や理解が充分でないような状況も生じるかもしれない。

このような観点から、異なる校種の教員が、打ち解けた雰囲気の中で、自由に議論することにより、協働的関係を構築する体験を得ることは意味深いことだろう。たとえば、その関係が本研修のように短期間のものであっても、このような経験を積み重ねていくことが、長期的な協働関係を構築するための重要な基礎になると考えられる。最終日に研究成果を発表し合う中で、その日の昼食を自然発生的に参加者全員で会食することになったが、このことは、協働的関係の構築がことさら難しいものではなく、意外と簡単に醸成されうるものであることを示しているかもしれ

ない。

(2) 個々の研究課題の深まり

研修最終日において、本コース参加者はそれぞれ以下のタイトルで作成したレポートを報告し、意見を交換した。

中学教員A：「実践的コミュニケーション能力を高める小中一貫教育を生かした指導のあり方」

中学教員B：「中学・高校の教科書における文法項目と言語活動に関する比較」

高校教員A：「適切な評価基準と評価のあり方についての研究」

高校教員B：「中学教科書で扱われる文法項目の調査と、英語学習初心者に対する指導の工夫」

高校教員C：「英語を苦手としている多くの本校生徒が、中学のどの段階でわからなくなるのかを考察する」

上記のレポートの発表内容は、どの参加者についても、研修第1日目における研究課題とは、少々異なるものである。これは、初日における情報交換や議論によって、各自が抱える疑問や指導の問題点が明確かつ具体的になり、参加者にとって、より現実的で指導に役立つ研究が行われた証であると言えよう。

例えば、高校教員Aの場合は、中学の教員との交流により、指導と評価の相互補完性に対する理解を深め、高校に比べれば一方進んでいる中学校における評価活動を参考に、高校におけるより良い評価のあり方について研究を進めたわけである。同様に、高校教員Bの場合も、4技能のバランスが取れた指導を行う前提として、指導する生徒達が英語学習のどの過程で困難を感じつまづいているのかを明らかにすることによって指導を改善しようと考えたわけである。

その他の3名の参加者に関しても、研究課題の精密化が行われ、参考となる文献を読み、必要となるデータを実際に収集・分析することにより、英語教育のプロとして、お互いに刺激を与え合う内容が発表された。

3. 今後の課題と展望

本年度の教科教育(英語)に参加した、5名の中高の教員は、研修意欲も高く、互いに刺激し合い、各自の今後の教育実践にとってプラスとなる研修を行っていたのではないと思われる。こうした研修から、岐阜県内の多くの教員に有益となる授業改善のヒントや方法論が誕生するきっかけが生まれるかもしれない。もちろん、中には、義務的に研修に参加し、最小限の努力で義務的に課題に取り組む教員も存在するかもしれない。しかしながら、こうした研修の中から、1つでも2つでも、多くの教員に資する研究が生まれる可能性があるならば、その可能性を大切に育ていく必要があるだろう。この意味において、優れた研修成果を広く周知させることを可能とするシステムの整備が大切であろう。

また、このような研修に助言者として参加することは、多くの教育学部の教員にとって有益であることは疑いのないことであろう。しかしながら、研修への参加が、単に義務的なものとなってしまうような仕組みも、今後整備していくべきだろう。